橋詰明男氏撮影

蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘
〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番10
TEL.0258-32-2811
◆スタッフ◆
小林国二・小林善秋・高橋潔
室賀清輝・高橋利春・加瀬由起子
近藤マリ子・近藤真弘・近藤善信
後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社

ご家族の皆さまでご覧ください

迎春

今年も宜しくお願い申し上げます　翠巌龍弘拝

二〇一一年の新年を迎えました。安善寺では毎年本堂での早朝初諷経は祝祷諷経が行じられます。一仏両祖様に供養し奉り、広大の慈恩を冀い、国家・世界平和、人々の幸福を祷ります。今年一年が皆様方にとって良い年であることを祈念申し上げます。

『従容録の第二則達磨廓然』の達磨大師と問答をされた南朝、梁の武帝蕭衍の長子、昭明太師蕭統が編集された『文選』の中に、「年住迅勁失（年の住くは勁失より迅く）」時來亮絃（時の来るのは亮に急絃のごとし）」（年の去りゆくのは、強い弓から放った矢よりも早く、時の流れくるのは、まことに速い調子で弾かれる琴の音のようである）という詩が載っております。まさに光陰矢の如しです。

私も年が明けて数え六十五歳、昭和六十一年十月から住職を務めさせて頂き、早二十六年目になりました。年齢のせいか一年があっという間に過ぎていくようです。道元禅師様の和歌に「閑らに　過ごす月日は　多けれど　道をもとむる　時ぞすくなき」があります。この和歌をみる度にいつも自身がいかに徒に空しい日々の生活をしているか深く反省させられます。

暮れには次のような文を目にしました。「今なさざれば、なす時ぞいつ。君なさざれば、なす人ぞだれ。今なすべきなり。君なすべきなり。時は待たず、人もまた往く」道元禅師が中国の天童山で修行中、炎天下で茸を干している老典座和尚に、若い者にさせたら、又、涼しくなってからされてはとねぎらいの言葉をかけた時、「他は吾にあらず」「更にいずれの時をか待たん」と答えられました。『遺経』にも「世は皆無常なり、早く解脱を求め、智慧の明を以て、諸々の癡闇を滅すべし」と、釋尊が説法されております。ついく私などは仕事を先送りしたり、他人を当にしたりしがちです。やるべき時、自分でやらなくては道をもとむる生き方になりません。

昨年十一月に故藤本幸邦御老師の一周忌法要に随喜させて頂きました。御老師は激動の時代、現代社会の問題と正面から向き合い、回りに流されずに信念を持って、先頭に立って行動され、人間はどう生きるべきか、人々の幸福を願って実践された人生でした。大勢の人から「おっしゃん」と親しまれ、感化感動を与えつづけられました。私も一日一時を大事に、閑らに過さない一年でありたいと願っております。

初め有らざるは靡きも　克く終わり有るは鮮し。『詩経』

【日々精進(十)】

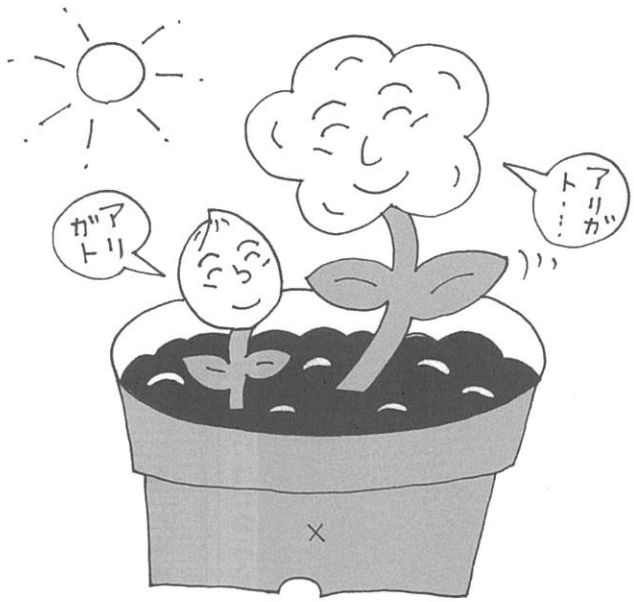
生まれてくれてありがとう

近藤 真弘

新年明けましておめでとうございます。

昨年は家族が一人増え、何かと慌ただしくも、嬉しい一年だったように思います。

この新年号の季刊誌と共に毎年縦長のポスターが送られていると思います。今年は「生まれてくれてありがとう」という言葉と共に赤ちゃんを抱く母親の絵が書いてあります。このポスターの揮ごうは皆様もご存じかと思いますが、昨年お亡くなりになった長野県の藤本幸邦老師のものであります。



とても特徴のある優しい字で、内容も心温まる言葉が多く、安善寺では毎年新年に、皆さまに送らせて頂いておりますが、仏間や、玄関などに張って頂いていている方もお見受けいたします。

早いもので藤本老師が亡くなられて一年が経ちました。昨年の十一月一周忌の法要に焼香させていただき、時の流れの早さを改めて実感いたしました。

大半の方はこの季刊誌や、安善寺の法要で藤本老師の事はご存じだと思います。安善寺とは先代からのお付き合いがあり、私の得度の師匠であり、安善寺にとって、私にとってもとても大切な方でした。

私が初めてこの季刊誌に文章を書いたのも、藤本老師が寄付を集め、中国の田舎に小学校を建てられ、その開校式に招待された際、学生だった私もお供させていただき、その時のご報告として書いたのが初めでした。

その時で藤本老師は九十歳を超えていたのですから、今考えてもとてもすごい事だと改めて貴重な経験をさせていただいた事に感謝しています。

そんなご老師の揮ごうされた今回のポスターですが、毎年いくつかの言葉と写真や絵柄のポスターからこちらで選ばせてもらい、長野の円福寺様より送っていただきます。今回は昨年長男真人が生まれたこともあり、このポスターを選ばせていただきました。

赤ちゃんを抱く母親の絵の上に「生まれてくれてありがとう」の言葉。まさに母親の素直な喜びの気持ちを表していると思います。

この言葉と絵柄には母親の生まれてきた子供への感謝と共に母親の愛情が深く表れています。当然の事ですが世の中には子どものいない方もいます。しかし母親のいない人は一人として存在しません。母親の目線から見ると「生まれてくれてありがとう」ですが、絵の赤ちゃんから見れば「生んでくれてありがとう」になります。

母親は生まれた赤ちゃんを抱き、多くの愛情を注ぎます、赤ちゃんも「和顔愛語」の言葉のごとく、にこやかな笑顔でそれにこたえます。

近年では耳を覆いたくなるような、親子間での事件が多く報道されています。

私はこのポスターを見る皆さんに赤ちゃんを自分に置き換えて見ていただきたいと思います。こんなに愛情を持って自分は生まれてきたんだなぁ。そうすれば自ずから自分の親への愛情、子どもへの愛情が湧いてくるのではないでしょうか。

新年からそんな愛情を感じる気持ちになって頂けたら幸いに思います。

今年もどうぞよろしくお願いいたします。

之を知る者は之を好む者に如かず、之を好む者は之を楽しむ者に如かず。『論語』

意味の分かるお経聞きたい

長岡市乙吉町　安楽山 龍穏院住職　櫻井 統一

いま宗教が根本的に問われている時であるが、葬儀は多く仏教の宗派によって行われている。いつも感ずることは引導を渡す僧が漢文訳の仏典のお経を唱えていることが多いのです。お経をなぜ分かりやすい現代語に訳せないのか、亡くなられた人も訳が分からなくて迷うであろう。会葬者もチンプンカン。

これは某新聞の投書で、そのタイトルが『意味の分かるお経聞きたい』である。その主は七十九歳、元教員とある。一読して、その主張に首肯される方も多かろう。

お経とは、お釈迦さまの金口より出た言葉で、「如是我聞」の語ではじまるものをいう。また経典受持の功徳を説くのは、大乗仏教の特徴でもある。教典を尊重し、受持し、解説し、書写し供養することは、信仰の実践として昔から大切な行であった。そうすることにより、人間の悩みや、現実社会の矛盾を乗り越え、人間の完成をめざし、自己を陶冶した。

文字も言葉も印度と中国では全くちがう。それを、漢字で中国語に訳すのは大変な学力が必要であっただろう。漢訳大蔵経はその金字塔だ。しかし、漢訳すると原意が失われるなどの理由で印度の古い言葉のまま中国に伝えられ、そして日本に入ったのが「陀羅尼」（ダラニ）だ。読んでいる僧も、聞いている人も意味は全く分からない。そういうお経もある。

中国と日本は同じ漢字の国だから、漢訳されたものを日本風に訓読することは可能で、その努力は奈良時代から行われてきた。返り点、送り仮名、ヲコト点などの方法をとってきた。にもかかわらず、お経は、多く漢字を音読している。なぜそうなったのか。禅宗に限っていえば、禅では「不立文字、教外別伝」といって、教典や語句にとらわれないで、行動によって体験的、直感的に仏性を覚悟し、お釈迦さまの悟りに直入することを宗旨としている。したがって、お経の意味が分かる、分からないはここでは問題でない。「言を尋ね語を逐うの解行を休すべし」―普勧坐禅儀ほか―と道元禅師は述べて、教典に頼ることを排された。燃犀の明ともいうべきか。

しかし、この考えは他宗には通じない。では何があったのか。宗教特有の権威主義、独善主義、宗派のセクショナリズム、はたまた為政者の政治的配慮がそうさせたのか。よく分からない。

ともあれ、私たちは頭で納得できないものは受け入れない。理屈の通らないものは認めない。それはそれでよいのだが、しかし、一方納得できないのも、理屈が通らないのも、反対はしない「畏敬と寛容と莫逆」の心があってもいいのではないか。年をとったからか、そう思ったりする。また、学問を究めた人のお話や、著書などには、そうしたご意見を伺うことがしばしばである。

何事のおはしますをばしらねどもかたじけなさに涙こぼれて　これは西行のお歌である。一体どのような方がお祀りしてあるかは存じませんが、拝んでいると、ただただ有難くて涙がこぼれて仕方ありません、と詠っている。ご存知のように、西行は鎌倉時代最高の知識人である。その西行が「何事のおはしますをばしら」ないけれどもと、理屈を抜きにして、しかも、畏敬の念をもって詠っているところを見逃してはならないと思う。

越後は雪、降雪を聴きつつ、一炷の香を焚き、理屈抜きでお経に耳を傾け、佛さまを素直に拝めたら、どんなにか心安らぐことだろう。宗教は信仰である。

人の己を知らざるを患えず、人を知らざるを患う。『論語』

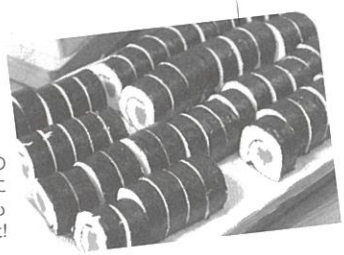
第十五回 KAKA笑の会

なごやかに終了『精進料理の夕べ』

ずらり並んだお膳。これから実行委員がテーブルに運びます

ご老師から盛りつけの指示を受ける実行委員

「このお椀、舞茸入ってないよ!」「あら! たいへん」



ヤマトイモの海苔巻きは均等に切るのもとても難しかった!

秋も深まった十一月六日の土曜日の夕べ、安善寺本堂において精進料理を味わう会が、約百名のお客様をお迎えして開催されました。

精進料理の夕べも四回目となるのですが、「この次はいつですか?」「必ず来ますから、また精進料理、お願いします」など、以前参加された皆様のたくさんのリクエストにお応えしての実現となりました。そのような熱いご要望に、小金山泰玄老師も今回は前日より来岡、ゴマドーフも材料のゴマから丁寧な作業でとりかかってくださいました。

当日は朝からKAKA笑実行委員総出で老師の指示を仰ぎ、準備に大奮闘!

では、当日寄せられた感想や質問を報告しましょう。

問 「胡麻豆腐のゴマはどういうふうにするのですか?」

老師 「『の』の字を書くように右回りで擦るのがコツです」

問 「お出汁はどのようにつくるのですか?」

老師 「昆布で取ります。後の昆布はおかずになりますよ」

問 「飛龍頭という名前は?」

老師 「関東ではがんもどき、関西では飛龍頭といいます。豆腐の水気をきって、ヤマトイモと混ぜ、具を入れて、揚げます。精進料理の代表的な一品です。ポルトガル語からきている言葉ともきいています」。

寄せられた感想で多かったのは、おいしい、というご意見はもちろんですが、「どうやって作るのですか?」「初めての食感です」「私も作ってみます」等。

中にはこんな質問も。

問 「御老師のお年はおいくつですか?」

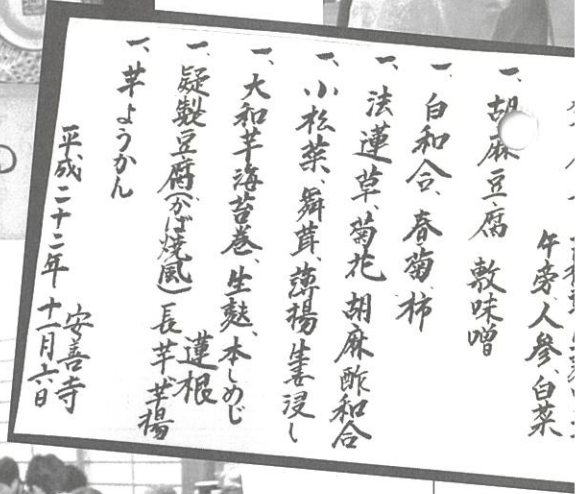
老師 「(笑)還暦です」。

さすがに回を重ねて、ご老師とも打ち解けなごやかに「精進料理の夕べ」終了いたしました。

なお、今回は、あまりにも丁寧にお料理づくりに励ん

このセットにごはんとお汁が付きます。お酒もお猪口に一口ですが添えられました。

ご老師「この味なら合格ですよ！」
実行委員も口を揃えて「はい、苦労しました！」



午旁、人参、白菜
一、胡麻豆腐　敷味噌
一、白和合、春菊、柿
一、法蓮草、菊花、胡麻酢和合
一、小松菜、舞茸、薄揚生姿浸し
一、大和芋海苔巻、生麩、本しめじ
一、疑製豆腐（がば焼風）長芋、蓮根、芋揚
一、芋ようかん
平成二十二年　十一月六日　安善寺

ご老師自ら筆をお品書き

須弥壇の前で、ことさらありがたい味わいが…

「精進料理は美味しい!」「ヘルシー!」「野菜の持ち味が生きていますネ…」

足の弱いお客さまには
椅子の席もご用意しました

だためか、（品数を増やして少しでも多く味わっていただこう、というご老師の思い入れもあって）開始時間が少々ずれこんでしまったことをお詫び申し上げます。最後の後片付けには、残り物はゼロ！長時間作業をいただいたご老師、そして実行委員の皆様に、感謝。

ごちそう様でした！

では、ＫＡＫＡ笑の会、次回の催しをお楽しみに！

お別れ

（平成二十二年九月～十二月末）

上村マツ様　九月九日寂
長岡市荻野

品田フミ様　九月十五日寂
東京都杉並区

田中　正様　十月十六日寂
東京都東久留米市

大平勝彦様　十一月十八日寂
長岡市永田

貝瀬スギ様　十一月二十日寂
長岡市要町

佐藤君子様　十二月十六日寂
長岡市東栄

ご冥福をお祈りいたします。

不義にして富み且つ貴きは、我に於いて浮雲の如し。『論語』

徹関先生に学ぶ

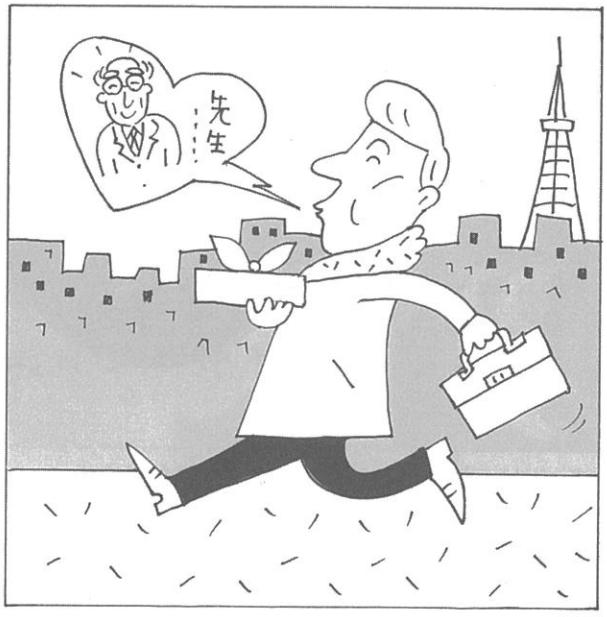
―中村先生を偲んで―（七）

西澤 正元

私は、筑波で先生にお会いして以来、何とかしてもう一度お会いしたいものと念願していたが、躊躇する気持ちと合い克してなかなか実現の機会がなかった。見附の教育長在任中の平成五年十二月、全国公民館大会出席の用務で上京することになった。私は思い切ってこの機会に東方学院に先生を訪問してみようと決心した。

十二月二日、東京は初冬の日差しがまぶしかった。私は全国公民館振興大会が終わるのを待ちかねて会場のプリンスホテルを出た。地下鉄丸の内線で御茶ノ水駅に降りる。東方学院は駅から歩いて数分、湯島聖堂の向かい。神田明神の門前にある小さなビルの中にあった。

はたして先生にお会いできるだろうか。私の胸は少年のように高鳴った。四階でエレベーターを降りると狭い廊下の奥の部屋に受付の札が下がっていた。案内を請うと、学生と思われる若い女性が出て来た。名刺を渡して、「午前に電話をしておいた者ですが」と来意を告げた。奥に引き込んだ女性が、しばらくして現れると、「どうぞ」と小部屋へ通された。大机と椅子でいっぱいの会議室らしい。



その部屋の壁面は、仏教や哲学関係の書物でびしりと埋まっていた。その隣の部屋が先生の執務室のようで、先客と思われる若い外人女性と通訳らしい日本人の男性、そしてカメラマンの男性が、先生と対談しているらしい。インタビューのようである。先生は月曜と木曜の午後を面会日にしておられると聞いていたが、千客万来で応接にいとまのない日々が想像された。

数分待った頃、「面会の人が待っているから」と対談を中断される声がして、先生が私のところへ歩を運んで来られた。筑波以来、十六年ぶりの対面であった。私の眼前に目を細めた先生の温顔があった。しかし、不思議に歳月の隔たりを感じない。それは、先生の人柄の魅力と、これまで折にふれてテレビでお目にかかっていたせいかも知れない。それまでの緊張感がほぐれて、ほっとした。私は打棒の日程の中へ割り込んだ失礼を詫びながら、お会いできた喜びを伝えた。「そう、筑波の分館でしたね」と先生は、遠い昔の出会いの日のことを思い出された。

東方学院での先生との対面は五分くらいであった。もし時間が許せば、これからの日本の教育について先生の助言をいただければと思っていたが、次の面会客が待っていたので遠慮した。ただ、先生が学問の師として和辻哲郎博士のことを著書に書いておられたので、和辻博士は、私の母校姫路中学の先輩ですと話したところ、「和辻先生のことは小論として学会誌に書いたことあるから、折があったら読んでください」と言われた。酒も煙草も飲まれない先生なので、私は長岡の銘菓「越の雪」を手土産にと差し出した。そして、また厚かましいことだがと自省しながら、退職後、頼まれて「教育にいがた」に寄稿した教職回顧録「デモシカ先生三十九年遍歴の記」の小冊子を差し出した。先生はパラパラとめくりながら、「今度の休みに読みましょう。教育長職は大変でしょう。まだ若いようですから頑張ってください」と激励された。

先生は、大正元年生れで八十一歳になられる。考えてみると、十六年前、先生との初めての出会いの時、文化勲章を受章された先生は、今の私と同じ六十五歳であられたことになる。驚きの外ない。

「ここは神田明神のそばで、地元の名物ですから召し上がって行ってください」と出されたみつ豆を有り難く頂戴した。そのみつ豆は、なつかしい黒砂糖の甘みであった。湯島聖堂は江戸時代の学問の府であり、神田明神は国学発祥の地である。そして寺子屋と自称されている東方学院には、八十一歳の今も、なお若々しく倦まず勉強…、先生はいつも勉強とは「強いて勉める」ことおっしゃっている…されている中村先生がおられる。私は新たな感動に満ち足りて神田明神の坂を下った。

以下、次号最終回へ続く

難きを其の易さに図り、大なるを其の細に為す。『老子』

旬歌 愁灯

［二十八話］

三つの音符

加瀬由紀子

毎年秋に開催されている長岡アジア映画祭は、昨年十五回という節目を迎えた。メイン作品の「キャタピラー」は、ちょうどこの作品でカンヌ国際映画祭主演女優賞を受賞した寺島しのぶの影響もあってか、リリックホールシアターでの上映はかなりの人出でにぎわった。私も入口で順番を待つ列に並んで席に着いた。

場内が暗くなり、フィルム映写音とともにスクリーンにタイトルが映し出される。このワクワク感こそまさに「映画」を観に来た、という醍醐味なのだ。

3D映像テレビやパソコン、携帯電話機で映画を鑑賞などという時代になってきても、映画館の大画面で名画を鑑賞する楽しみは、お気に入りの椅子に腰かけて愛読書をめくる喜びと共通のものがある。

「キャタピラー」は若松孝二監督の作品で、R15（十五歳未満視聴規制）に指定された反戦映画とうたっているが、毒っぽいユーモアを含んだ重い内容で、さすがに寺島しのぶの体当たり演技が光ってはいた。「ジョニーは戦場へ行った」というトム・クルーズが熱演した映画を思い浮かべる。それもそのはず脚本の土台となっているそうだ。

反戦映画というと、生々しい戦闘場面の作品が主流で観る気がしない、という人も多い。数ある名画の中で私のイチオシは、「かくも長き不在」というフランス映画である。戦闘場面は全く無いのに、いくさの不条理を描いた作品は他には見当たらない。

日劇の地下にあったアートシアターというマニアックな芸術映画を上映する劇場でこの映画は上映された。原作（脚本）はマルグリット・デュラス。仏領インドシナで少女時代を過ごした彼女の作品は独特のオリエンタリズムと夏の熱気に満ちた気だるさが身上だが、この作品も「不在」のうっとうしさを表わしている。

舞台はパリのキャフェ。女主人テレーズは街で見かけた浮浪者を、十六年前ゲジュタポに連れ去られた夫だと確信する。浮浪者は記憶を失っていた。テレーズの心に灯がともる。再会に胸ときめかせ、食事に誘うテレーズ。「ほら、思い出して。幸せだったあの頃を。結婚していた頃を。」ダンスシーンは涙なしでは見られない。思わず浮浪者の頭に触れてしまうテレーズ。そこには深い傷跡が、戦争があった…浮浪者はやはり別人だったのか…立ち去る浮浪者にテレーズは言う。「冬が来れば、また戻ってくる、きっと…」

テレーズ役はアリダ・ヴァリ。オーソン・ウエルズの名画「第三の男」に主演したイタリア女優である。監督のアンリ・コルピはアラン・レネと組んだ「去年マリエンバートで」「夜と霧」などの映画史に名だたる作品を残している。

「かくも長き不在」は一九六一年のカンヌ映画祭最優秀作品賞を受賞している。もう一度見たい映画なのだが、現時点では再映の予定もDVDもビデオすらもなく、全く不可能なのが残念だ。

ダンスの場面に流れた歌を紹介しよう。

「三つの音符」

三拍子の曲が
思い出へと誘う
店のざわめきも消え
楽譜を閉じ眠りにつく
でもいつか突然
思い出がよみがえる
忘れたかったのに
夏の町に流れる
下手な歌
決して忘れはしない
夏の街角で
歌っていた少女を

愛していると
歌を口ずさむあなた
たわいない歌詞
一本調子の歌
休暇のロマンスが
あなたの心を乱す
愛らしい少女
あなたは触れずじまい

初めて味わう感激
あなたを呼び戻そうと
少女は歌を贈る
夢は韻を踏むけれど
あなたの歌は：
始まるともなく終わる
踊りと歌のルフラン

三拍子の曲が想い出の
かなたから嗤う
苦しみの千夜一夜
残酷な幕が上がる

第五十三号、春号は平成二十三年三月五日(土)発刊予定です

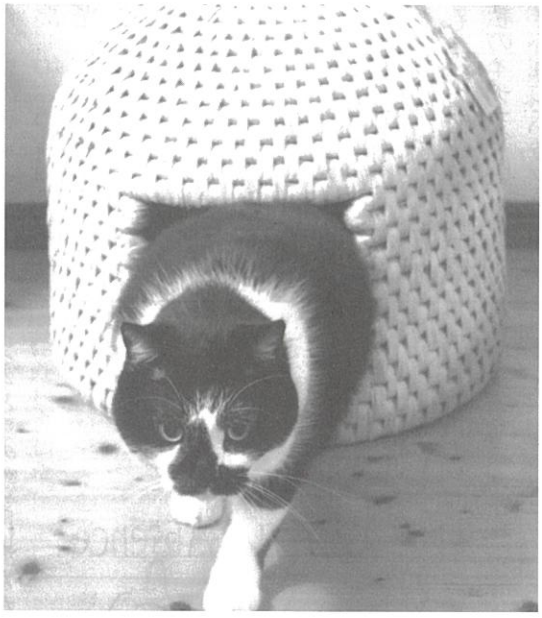
ボブの独り言

お母さんのお腹で聞いていたよ!!

ボブの独り言

昨年も本当にいろんなドラマを残して過ぎてゆき、また新しい年を迎えました。私も今年で五歳になりますが、最近は皆のいる部屋に大きな犬が二匹もいるものですから、閉まっているドアのガラス戸越に暖かな部屋を羨ましそうに覗いていると三歳の犬(ノン)が私を見つけてドアの反対側でガラス戸越しににらみ合いになってしまいます。私がその場を離れない限りドアの内側で座って見ているものですからそうそうに引き上げますが、四ヶ月を過ぎた真人君を囲んで和やかな部屋の中に私も仲間入りしたいなーと、いつも思っているのです。

外は外で庭を散策しているとタヌキにでくわす事があるのです。暮れには子ダヌキが弱りきってヒョロヒョロしているのを見かけましたがどうなったのか?寒空の下、餌もなく大変な思いをしていることを思えば、私なんか本当に幸せもので喜ばなければならないのですか…。



今までペットに注がれていた住職はじめバーバ(年が改まったのを機会に今までお母さんと呼んでいたのを改めました)の目が可愛くなってきた真人君に注がれることが多くなってしまいました。

時折、住職はお母さんに抱かれている真人君に向かって「いないいないバー」って言っては、「笑わないなー、女性の声の方が良いのかなー?」と初孫の前では愛想を崩しています。私が何よりも驚いているのは、私でさえサクラが吠える声を聞くと怖くてそそくさと逃げ出すのですが、真人君はサクラが至近距離で吠えても平気な顔をしています。生まれる前から皆で心配していたことだったようですが「お母さんのお腹の中でサクラの吠える声をしっかりと聞いているので大丈夫!」って、住職の友人がさかんに言って下さったとうりだったようです。その友人も昨年の夏、そんな様子を見ることもなく事故でお亡くなりになってしまったそうです。お元気だったら「そうでしょー」ってにこやかにおっしゃっていたかも知れません。

私も今年こそはノンちゃんとも仲良くしてみんな一緒に賑やかに過ごしたいと思っております。ニャーン

お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。
ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例

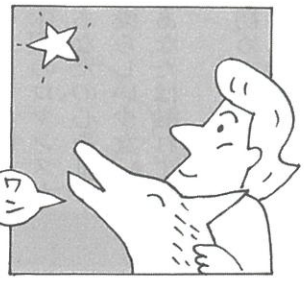
- 思い出話/ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- 私に言わせて/家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- 教えてください/仏事のしきたりや疑問(編集部や住職がお答えします)など。
- 嬉しい・楽しい/嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

編集雑感

明けましておめでとうございます。私事ですが、昨年当山御住職や主人等々のライオンズ仲間の古澤豊さんが七月に急逝され、皆で大泣きをして別れを惜しみました。お酒が強く温和な方で、ニコニコと友人達の長男的な方でした。

古澤さんは以前より警察犬としてシェパードを数頭お持ちで、我が子のように教育しておられましたが、残されたシェパード達は古澤家の主の異変に気付き、話せないながらにストレスを持っていました。そこで古澤家の次女の小百合さんが立ち上がり、女性訓練士を目指す決意をされ、日夜お父様の大切なシェパードと共に歩み始めました。

無我夢中の小百合さんにシェパード達は寄り添い導いてくれたそうです。昨年の秋、小百合さんにとって初参加の競技会で大先輩方の訓練士さん達を抑えて堂々の三位に入賞し、家族・犬仲間・警察関係者など涙の受賞だったとお聞きし、私たちも喜びの涙にくれました。



古澤さんに早い別れをし落ち込んでしまいましたが、残してゆかれたシェパード達が御主人の代わりに皆を元気づけていると思います。テレビ局も小百合さんの女性訓練士としての旅立ちを取材して夕方のNSTニュースで放送し、これからも追跡取材をするとのこと。「小百合さん頑張れ! 皆で応援していますよ」とペンをとりました。

高橋 利春内

終わり慎(つつし)むこと始めの若(ごと)くなれば、則(すなわ)ち敗(やぶ)るる事無し。『老子』